

大野城市の文化財

第 44 集
国指定史跡 牛頸須恵器窯跡



2012年

大野城市教育委員会

序

大野城市には、国指定特別史跡大野城跡などたくさんの遺跡や民俗文化財が残されており、毎年調査を実施しています。その内容について、市民の皆様により分かりやすい形でお伝えしようと年1冊発行してまいりました『大野城市の文化財』は、今回で44冊目になります。

今回は、大野城市の南部から春日市・太宰府市に広がる牛頸窯跡群を紹介します。牛頸窯跡群は平成21年2月12日に「牛頸須恵器窯跡」として史跡指定されました。これを記念し、平成22年1月に九州国立博物館でトピック展示を実施しました。本書はその解説冊子を再編集したものです。

牛頸窯跡群は、6世紀中ごろから9世紀中ごろにかけての300年間に、総基数500基超の窯跡が作られた九州最大の須恵器窯跡群です。窯は大和政権の拠点施設である那津官家や大宰府に近い場所で操業されただけでなく、焼かれた製品も運ばれるなど密接な関係がありました。こうした関係の下におこなわれた牛頸窯跡群の須恵器生産は、当時の政治的・社会的情勢をよく反映しており、北部九州のみならず、日本の歴史を知る上で欠くことができない遺跡です。

本書を広くご活用いただき、牛頸窯跡群と窯が作られた時代と地域への理解を深め、よりよいまちづくりのために、本書が少しでも役立てれば幸いです。

平成24年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 吉 富 修

目 次

I. 牛頸須恵器窯跡とは？	1
II. 牛頸須恵器窯跡の発見	4
III. 牛頸須恵器窯跡の開窯と変遷	6
操業のはじまりと多孔式煙道窯（6世紀）	
生産の拡大と転換（7世紀）	
西海道一の窯場へ（8世紀）	
生産の衰退と終焉（9世紀）	
IV. 様々な遺物と工房の風景	14
様々な遺物	
工房の風景	
V. ヘラ書き須恵器と工人墳墓	16
ヘラ書き須恵器	
工人墳墓	
VI. 牛頸須恵器窯跡の歴史的特徴と今後の保存	18

凡 例

1. 本書は、平成22年1月に九州国立博物館で実施したトピック展示「牛頸須恵器窯跡とその世界」のパンフレットを再編集したものです。
2. 本書に掲載したイラスト・写真につきましては、下記の方々および機関からご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）
岩本恵・岡紀久夫・小田富士雄・九州大学考古学研究室・九州大学埋蔵文化財調査室・田尻義之・田中良之・宮本一夫・山上成邵
3. これまでの調査・研究では、各窯跡群や遺跡群全体の名称として「牛頸窯跡群」を用いています。本書では表記の都合上、指定名称である「牛頸須恵器窯跡」を用い、「牛頸窯跡群」と同義のものとして使用します。

I. 牛頸須恵器窯跡とは？

牛頸須恵器窯跡は、福岡平野の南東部にある背振山系から北側にのびる山麓の丘陵地帯に位置します。その範囲は、福岡県大野城市上大利から牛頸を中心とし、春日市・太宰府市の一部を含む東西4km、南北4.8kmに広がります。

牛頸須恵器窯跡が位置する丘陵は、川の開析作用により多数の谷が形成されています。早良型花崗岩を基盤とし、表層は風化が激しく真砂土となっています。

この丘陵斜面には、須恵器窯跡が多数確認されています。1960年代以降、大野城市教育委員会をはじめ、福岡県教育委員会・春日市教育委員会・太宰府市教育委員会ならびに九州大学・国士舘大学・立正大学・大谷女子大学（現 大阪大谷大学）など多数の機関・組織によって発掘調査が実施されており、これまでに調査された窯跡は300基を超えます。近年実施した分布調査の結果では、山中になお100基を超える窯跡が残されていると推定され、未調査のまま消滅したものを含めると、牛頸須恵器窯跡は総基数500基以上の一大須恵器窯跡群であることが判明しました。窯の数と内容は、西日本では大阪府にある大和政権の窯場として著名な陶邑窯跡群に次ぐ規模で、九州最大の須恵器生産地として極めて重要な遺跡群です。

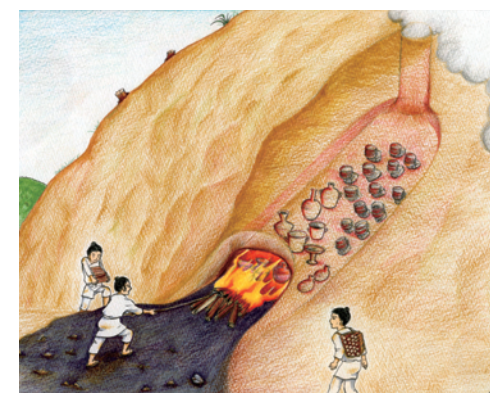
こうした遺跡の重要性から、今でも窯跡が残されている場所のうち、12カ所約220,000㎡が平成21年2月12日に「牛頸須恵器窯跡」として国史跡に指定されました。

本書は、これまでの調査・研究成果を基に、その重要性をお伝えします。

用語解説



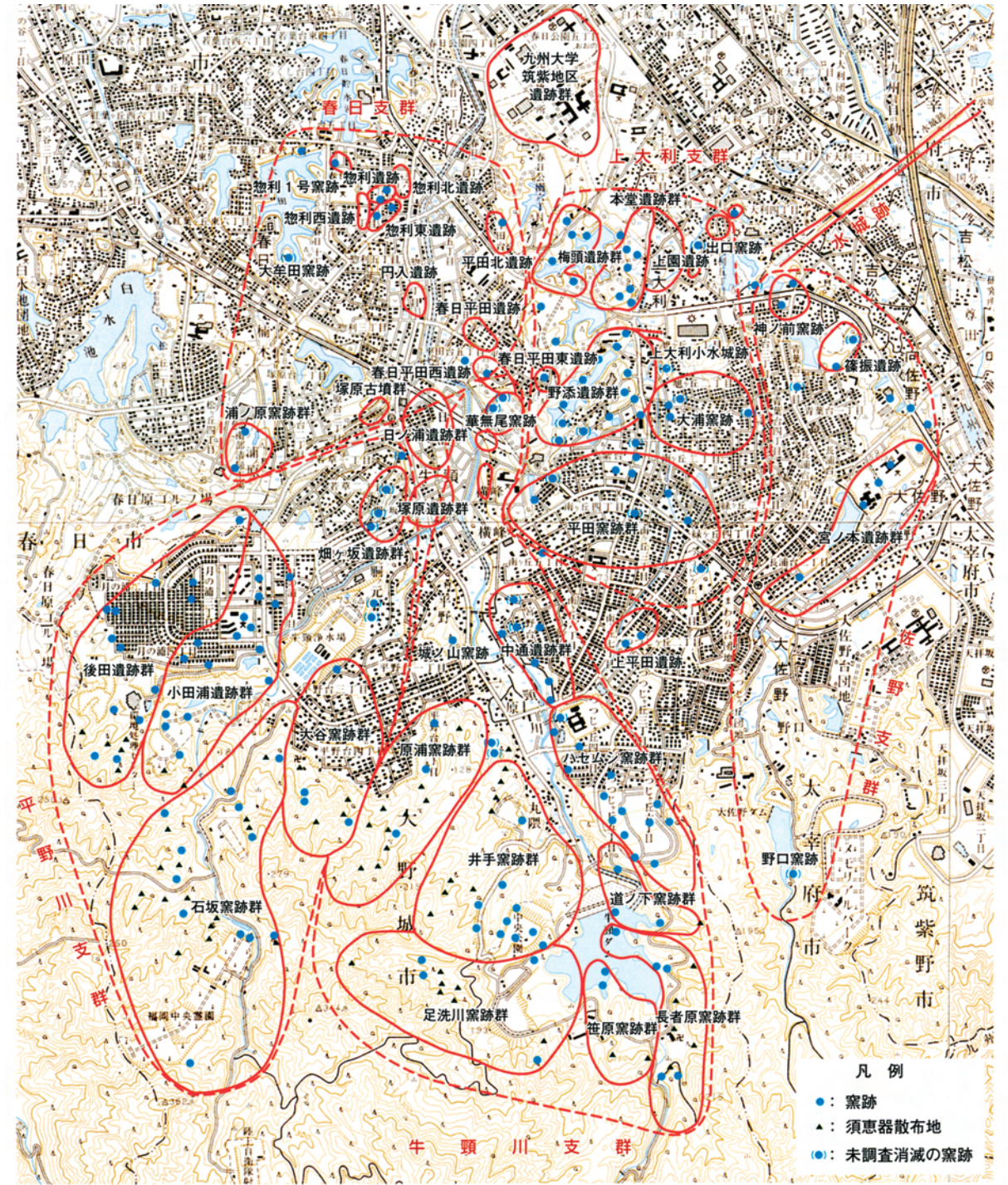
須恵器とは？ 須恵器は、灰色・硬質・無釉の焼物です。成形にはロクロが用いられ、甕の成形にはタタキ板・当て具を用いて叩きしめを行います。窯で焼かれ、1000℃以上の還元焰焼成により灰色に発色します。5世紀初め頃、朝鮮半島から日本各地に技術が伝えられました。



窯の構造 須恵器窯は、単室の窯という意味と近世の連房式登窯と混同を避けるため「窖窯」の呼称が用いられます。窯の床面は、傾斜のあるものと平らなもの（平窯）があります。須恵器づくりの技術とともに朝鮮半島から日本に技術が伝えられました。



牛頭須恵器窯跡の位置



牛頭須恵器窯跡の窯跡群・遺跡群分布図

II. 牛頸須恵器窯跡の発見

九州大学の調査

九州大学には、牛頸須恵器窯跡で採集された遺物が20点余り所蔵されています。これらは、中山平次郎博士や鏡山猛教授が大正時代から昭和初期にかけて採集されたものです。採集された須恵器を見ると、釉着したものや焼けひずんだものが含まれており、窯跡周辺で採集されたことが推測されます。遺物の年代は、奈良時代のものがほとんどです。今では、これらの資料がどこで採集されたのか特定できませんが、牛頸須恵器窯跡の研究史上、極めて貴重な遺物群です。



中山平次郎 博士（九州大学所蔵）



鏡山猛 九州大学名誉教授（九州大学所蔵）



九州大学所蔵牛頸須恵器窯跡採集須恵器

昭和3年の調査

昭和3年3月29日、九州日報（現在の西日本新聞の前身）に筑紫郡牛頸で須恵器窯跡が発見されたことを報じる記事が掲載されました。記事は、福岡県調査委員島田寅次郎氏が牛頸区長山上高太郎氏の案内により牛頸城ノ山で発見された窯跡の調査を行い、規模と形状について詳細に報じています。記事によれば、「窯は底が埋まって居るから正確な測量は出来難いが、間口の幅、上部で三尺二寸五分（98.4cm）、中央部で三尺六寸（109cm）あり、窯中の最も広い所は六尺二寸（187.8cm）に達する、而して間口から奥へ一尺四寸勾配を有し九尺五寸（287.8cm）の所へ至りて三個の煙突が上に向って穿たれて居る、而して中央の煙突の直径一尺八寸五分（56cm）、左方は一尺七寸五分（53cm）、右方一尺五寸五分（46.9cm）で高さは約八尺七寸（263.6cm）に達して居る」（一尺＝30.3cm）とあり、煙突が3個ある牛頸須恵器窯跡特有の多孔式煙道窯であったことが分かります。

その後、調査が進められ、4月10日の記事によれば、窯の中から「甕の破片が九十ヶ」出土したと報じられています。なお、この窯を発見したのは牛頸在住の人で、「少年時代嘗て1度見た事があつたといふのであるが、最近二十萬圓を洞窟内で発掘した夢を見、夫れが子供の時に見た城の山の洞窟」であったため探し当て、掘り出したそうです。

この調査の記録は昭和14年の『史蹟名勝天然記念物調査報告書第13輯』で島田氏により報告され、学会に牛頸須恵器窯跡の存在を初めて知らせました。また、山上高太郎氏は牛頸に残る須恵器窯跡の歴史的重要性を認識し、さらに大野城跡・御笠の森の保護にも努めるなど、郷土の文化財保護に取り組んでいます。

この窯跡は現在でも平野神社南側の城ノ山に残っています。山の尾根から少し下った所に窯体の一部が見え、窯内には3個の煙突が今でも残っています。



城ノ山の全景（中央の山）と牛頸公民館（右手前）



山上高太郎氏と牛頸城ノ山窯跡

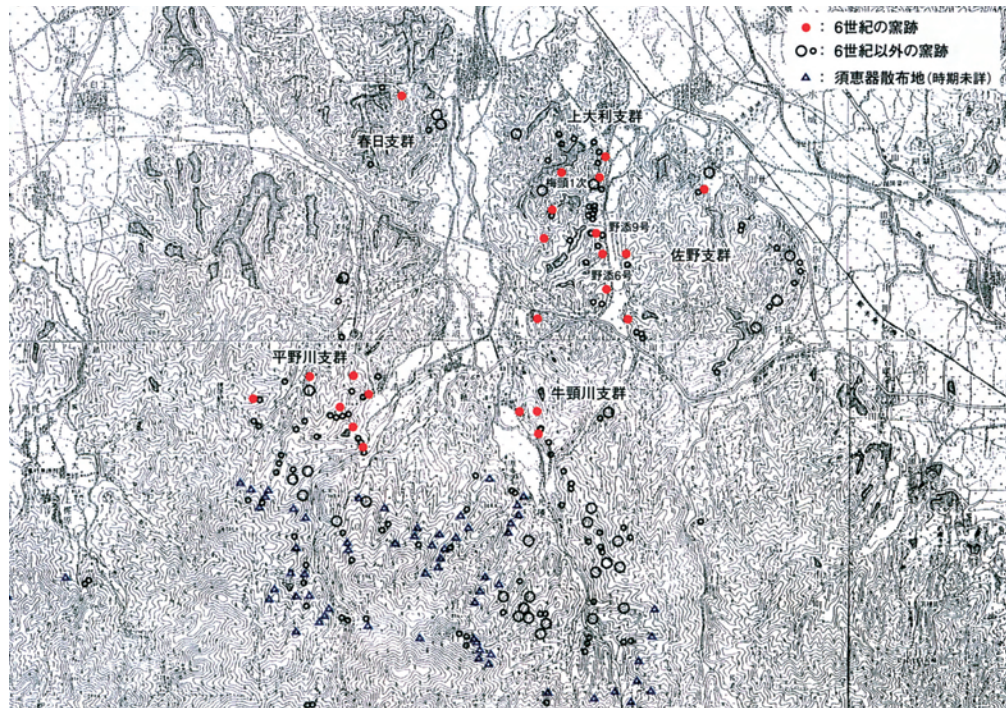
Ⅲ. 牛頸須恵器窯跡の開窯と変遷

操業のはじまりと多孔式煙道窯（6世紀）

牛頸須恵器窯跡の操業は6世紀中頃に始まります。上大利支群の野添6号窯跡などがこの時期にあたり、平野部に近い丘陵の入口に窯が作られます。後半になると、次第に窯は谷奥へ入り込んでいきます。一方で、新たに春日支群で操業を行う群が現れます。さらに6世紀末頃になると、窯の数は一気に増加し、牛頸支群や佐野支群にも新たな窯場が現れ、後に牛頸須恵器窯跡と呼ばれる地区全体に窯が展開し、以後広い範囲で操業が行われます。

この時期はつまみがなく底の丸い蓋杯（杯H）のほか、椀・高杯・甕などの小形器種と甕・大甕が焼かれます。6世紀後半段階では、出土総重量に占める甕の割合は7割に及び、甕の製作に力が注がれていました。また、この時期は瓦も焼かれています。日本では最も早い段階で瓦生産を行っており、製品は那珂・比恵遺跡（那津官家推定地）からも出土しています。

窯構造は、6世紀後半の野添9号窯跡は奥壁が絞り込まれる紡錘形になります。しかし、6世紀末になると大きな変化が現れます。多孔式煙道窯の登場です。これは、中通A-2号窯跡のように焚口から窯尻まで幅があまり変わらない短冊形とでも呼ぶべき平面形をとり、最大の特徴は排煙孔が2～6個と複数開けられることです。この多孔式煙道窯が登場する頃、瓦の生産が行われ、韓国の瓦窯に複数の煙道をもつものが存在することから朝鮮半島との関わりを指摘する意見もあります。



6世紀の窯跡分布図



野添9号窯跡



梅頭1次1号窯跡



古墳時代の窯の操業

全長10m以上ある多孔式煙道窯を用い、大形品である甕を含めた焼成がおこなわれる。



6世紀の須恵器

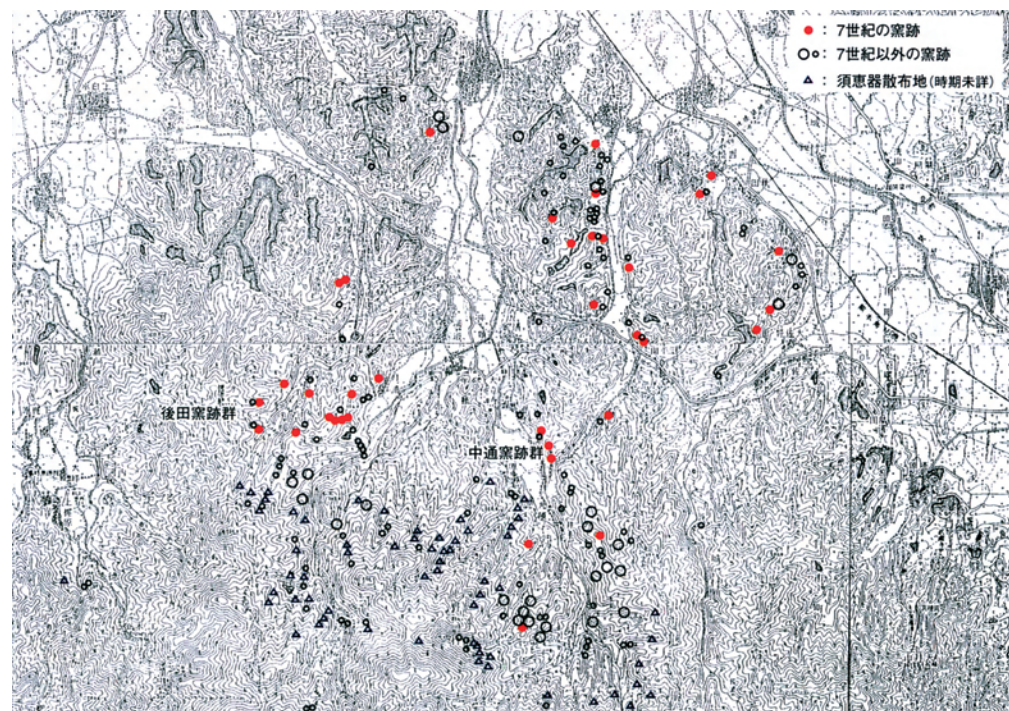
生産の拡大と転換（7世紀）

窯の操業は盛んに行われます。特に前半代は窯の規模が最も大きく、数も増加し、最初のピークを迎えます。中頃になると一時窯の数が減少しますが、後半になると再び増加し、次第に山深い所に窯を作るようになります。

7世紀前半は、多孔式煙道窯で6世紀と同じくつまみがなく底が丸い蓋杯（杯H）のほか、椀・高杯・甕などが焼かれます。陶棺が焼かれたのはこの頃ですが、野添遺跡7次2号窯跡出土陶棺の脚の多さは特徴的です。棺蓋は畿内系と考えられる技術で作られています、脚の作り方はそれとは異なる在地的なものです。一方、蓋杯ではつまみ付きのもの（杯G）が作られるようになります。

中頃になると、直立煙道窯が登場します。これは煙道が奥壁に接してほぼ直立するように立ち上がるもので、以後後半にかけて次第に主流となります。多孔式煙道窯は次第に少なくなり、全長10mを超えるような大形の窯も少なくなります。後半になると全長5m以下の小形の窯跡が出現し、大形品と小形品の焼き分けがおこなわれている可能性があります。

後半になると、つまみ付きで高台付の蓋杯（杯B）が主流となり、高杯などの形態も変化します。また、筑前国内（現在の福岡県西北部）では牛頸須恵器窯跡のみで須恵器生産がおこなわれ、筑前一国の須恵器生産を牛頸が担ったようです。新しい器種の出現と窯構造の変化や小形化、一國一窯体制への変化は期を一にしており、牛頸須恵器窯跡の大きな転換点と考えられます。



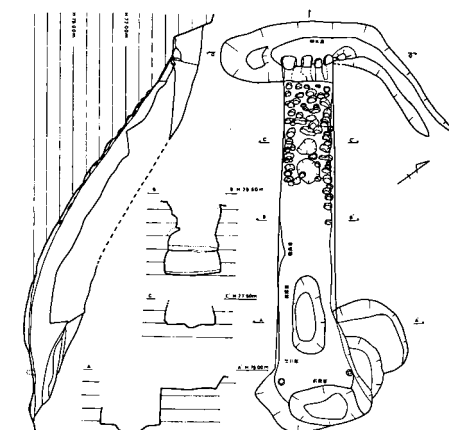
7世紀の窯跡分布図



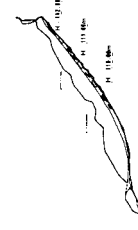
中通A-2号窯跡（多孔式煙道窯）



後田60-1号窯跡（直立煙道窯）



中通A-2号窯跡実測図（S=1/300）



後田60-1号窯跡
実測図（S=1/300）



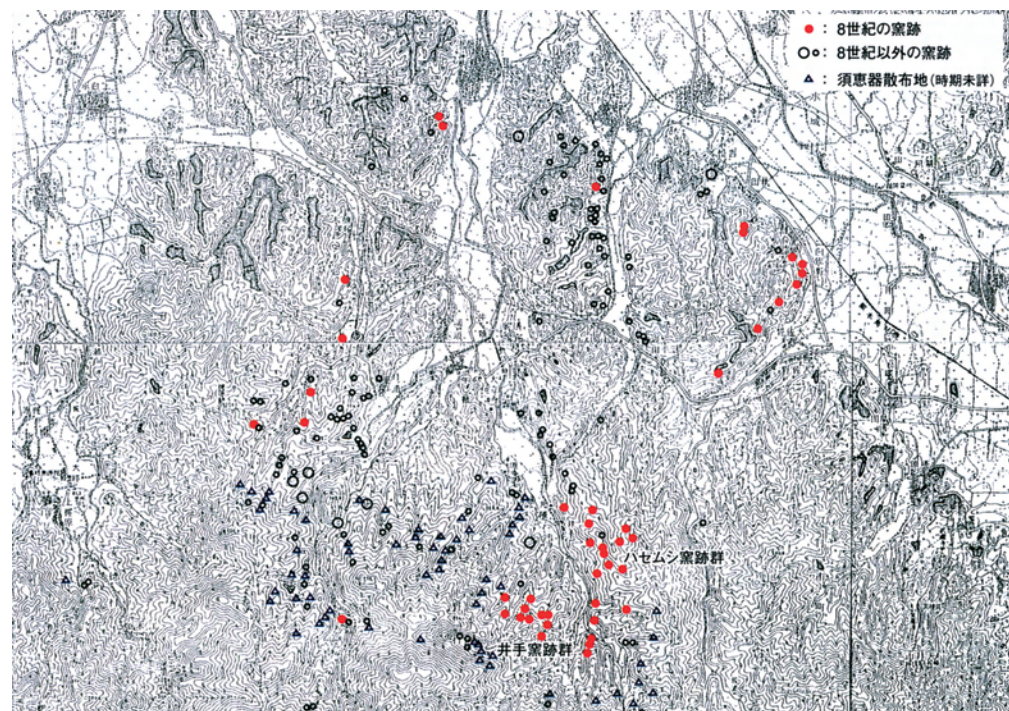
7世紀の須恵器

西海道一の窯場へ（8世紀）

牛頸須恵器窯跡の操業期間の中で、最も多くの窯が造られ、生産される器種も最も豊富な時期です。前代に比べてさらに山奥へ操業範囲を広げている支群もあり、全体で盛んに操業が行われています。中には規模の大きな窯と小さな窯が並ぶように造られるものがあり、大きな窯では甗などの大形品、小さな窯では蓋杯などの小形品を焼くという、製品の焼き分けを行っています。

窯はすべて直立煙道窯です。大形の窯は全長7～8m程度で、7世紀に比べて規模が小さくなります。また小形の窯は全長3～4mのものを中心とし、数は大形のものよりはるかに多くなります。むしろ小形の窯を中心に生産が行われているようです。ハセムシ6地区から出土した須恵器のうち、大形品である甗はわずかに2%、その他は蓋杯など食器を中心とする小形品で占められていました。小形の窯ではこうした食器類が大量に焼かれ、大宰府をはじめ西海道各国（現在の九州地方）へ運ばれていたようです。牛頸須恵器窯跡は、8世紀前半の西海道で最も大規模な生産を行っていた窯場でした。

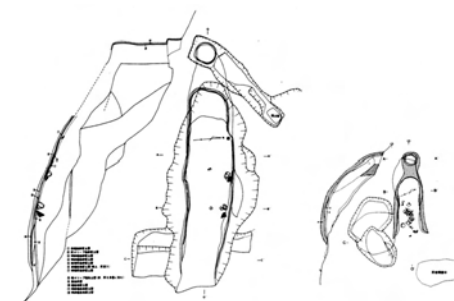
8世紀後半になるとさらに窯の規模は小さくなり、小形の窯がほとんどとなります。最も小さな窯では、全長1.8mの極小のものもあります。この時期には甗を焼く窯はなくなり、古墳時代以来、須恵器生産の主要品目であった甗は生産されていないようです。



8世紀の窯跡分布図



ハセムシ窯跡群18地区



ハセムシ18-I号窯跡
実測図 (S=1/300)

ハセムシ18-II号窯跡
実測図 (S=1/300)



奈良時代の窯の操業

7世紀後半以降になると全長5m以下の小形の直立煙道窯が増え、蓋杯・皿などをはじめとする小形食器類を中心に焼かれます。



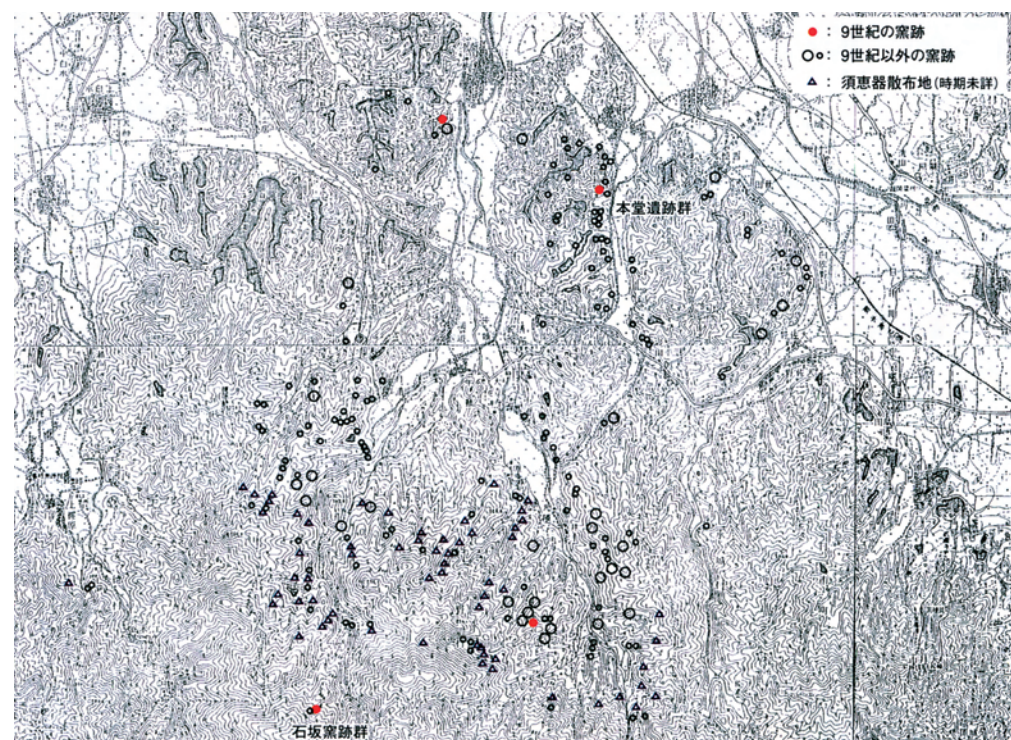
8世紀の須恵器

生産の衰退と終焉（9世紀）

9世紀に入ると、牛頸須恵器窯跡では窯の数が急減します。各支群とも窯は確認されますが、数は1～2基程度で、全体の生産量は前代に比べて極端に落ち込んでいます。また、焼かれる器種も減少しています。壺などを含んで豊富な器種が焼成された前代までとは異なり、蓋杯と杯・皿などの限られた器種のみが焼かれているようです。

この時期の窯で、最も注目されるのは石坂E-3号窯跡です。9世紀中頃の操業と考えられるこの窯は、それまで牛頸須恵器窯跡で確認されていた窯とは異なり、焚口が絞り込まれる小判形の平面プランをとります。ここで生産されたのは、蓋杯・鉢・甕・大甕です。特に大甕は8世紀後半以降熊本県荒尾地域の窯跡群で生産されるものと同じ特徴を持つもので、口縁の部分が二重口縁になるものです。8世紀後半代に甕を焼くことを中断していたことと、甕の特徴を考えると、全く異なる技術が使われていると言えます。こうしたことから、石坂E-3号窯跡の操業には肥後地域の須恵器工人が関わっていた可能性が高いと考えられます。

石坂E-3号窯跡が操業された後、周辺で窯が継続して操業が行われた様子はありません。窯跡は、牛頸須恵器窯跡の中でも最も山奥にありますが、さらに奥の山ではこれまで須恵器窯はまったく見つかっておらず、牛頸須恵器窯跡における須恵器生産は、このころ終了しているものと考えられます。



9世紀の窯跡分布図



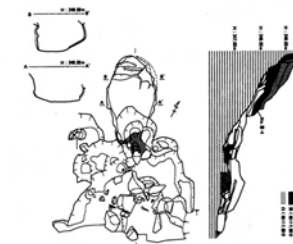
本堂5次6号窯跡



石坂窯跡群E地点（中央は3号窯跡）



本堂5次6号窯跡実測図
(S=1/300)



石坂窯跡群E-3号窯跡実測図
(S=1/300)



9世紀の須恵器

IV. 様々な遺物と工房の風景

様々な遺物

牛頸須恵器窯跡は須恵器を主に焼成していますが、その他にも様々な製品があります。瓦は6世紀末～7世紀前半に朝鮮半島から技術が伝えられたようで、日本国内では最も古い時期に生産が行われます。陶棺は近畿地方や岡山県などに多く分布していますが、九州では牛頸で初めて生産が確認されました。6世紀末～7世紀初め頃に生産が行われたようで、その特徴から近畿地方の影響を受けたと考えられます。

円筒状土製品は系譜・用途は不明ですが、韓国の鉄生産遺跡で出土するL字状の送風管に似ています。時期は6世紀末～7世紀初め頃にあたります。瓦塔は仏塔を模して作られた土製品で、東日本に多く見られ、九州では豊前地域で8世紀頃に生産がおこなわれます。

その他、硯・権など多様な製品が生産され、その系譜は国内のみならず朝鮮半島とも関わりを持ち、牛頸須恵器窯跡が多様なつながりを持っていたことを示しています。



軒丸瓦（月ノ浦Ⅰ号窯跡）



陶棺（野添遺跡7次2号窯跡）



円筒状土製品（小田浦窯跡群28地点）



瓦塔（本堂遺跡5次調査）

工房の風景

牛頸須恵器窯跡では、窯と同じ時期の集落が見つっていますが、これまでの調査では、工房跡の存在を示すロクロを据えた痕は見つかっていません。しかし、集落内の竪穴住居跡や土坑内からは粘土や焼成不良の須恵器が出土しており、須恵器工人がいた集落であったことを教えてくれます。また九州大学筑紫キャンパス内遺跡からは、甕の成形に用いられる当て具・タタキ板やヘラ状工具が見つかっており、工房の風景の一端を垣間見せてくれます。



竪穴住居跡から出土した粘土
（本堂遺跡1次調査）



須恵器作りの道具と製作工程で粘土を切り取った切削物
（タタキ板等木製品は九州大学所蔵）

V. ヘラ書き須恵器と工人墳墓

ヘラ書き須恵器

ヘラ書き須恵器とは、土器を焼く前の器の表面にヘラなどの先の尖った道具で文字などを書いたものです。牛頸須恵器窯跡では、こうしたヘラ書き須恵器が多数見つかっています。その中には、税を納めるための書式どおりに書かれたものがあり、律令制が地方へ普及していたことを示す重要な資料となっています。

また、ヘラ書き須恵器の中には人名の分かるものもあります。7世紀には「大神部見乃官」、8世紀には「大神君百江」「大神部得身」「大神部麻呂」「大神部□□養」「内椋人麻呂」「押坂□」があり、これらは須恵器製作にあたった工人と考えられます。中でも「大神君・部」は多数を占めており、牛頸須恵器窯跡の工人は大神部を中心としていたことが分かります。

このように、ヘラ書き須恵器は当時の律令制の施行状況や工人の名前など、地方ではなかなか残らない情報を伝えており、極めて貴重な資料です。



おおみわべ み の かん
「大神部見乃官」
(本堂遺跡群7次調査)



ちくしまえのくに な かぐん
「筑紫前国奈珂郡
てとうり
手東里大神部得身
・・・
并三人
ちよう
調大一厩隻和銅六年」
(ハセムシ窯跡群12地区)

工人墳墓

古墳時代後期になると、全国的に横穴式石室をもった直径10～20mの小古墳が群集し、激増します。牛頸須恵器窯跡でも、中通・後田・小田浦といった古墳群が調査され、窯との近接性や副葬品などから須恵器工人が埋葬されたと考えられていました。

ところが、梅頭1次1号窯跡では須恵器窯跡内から銀象嵌鉄刀や須恵器などが出土しました。これは後期古墳の副葬品と同じ内容であることから、須恵器窯を墳墓に転用したものと考えられます。また、梅頭3次2号窯跡からは窯の焚口付近で遺体を火にかけた痕跡が確認されました。窯を墳墓にすることから被葬者は須恵器工人と考えられ、極めて珍しい資料です。

このように、牛頸須恵器窯跡では工人の墳墓として窯を転用するものと通常の古墳を使う状況が確認されました。窯転用墳墓は梅頭遺跡群に集中しており、いずれも被葬者は一人のみで、横穴式石室で見られる追葬は行われていません。こうした墓制の違いは、それぞれの集団が異なることを示しており、特に窯を墳墓に転用する在り方は福岡を含め九州では見られない墓制です。このことから、梅頭窯跡群の窯転用墳墓の被葬者は在地の人ではない可能性が高く、ヘラ書き須恵器に見られる大神部に連なる人たちであったと考えられます。



梅頭1次1号窯跡遺物出土状況



梅頭1次1号窯跡出土銀象嵌鉄刀



梅頭遺跡3次2号窯跡カマド塚状遺構



後田古墳群全景

VI. 牛頸須恵器窯跡の歴史的特徴と今後の保存

牛頸須恵器窯跡が操業を始めるのは6世紀中頃のことです。それから9世紀中頃にいたる約300年にわたり操業が継続され、窯の数は総基数500基を超えると想定されます。このように大規模・長期間に操業された牛頸須恵器窯跡を通観すると、生産方針が時期ごとに変化しており、その在り方は極めて劇的です。では、そうした変化をもたらした生産体制や牛頸窯の管理者はいかなるものであったのでしょうか。

牛頸須恵器窯跡から出土したヘラ書き須恵器には、生産にあたったと考えられる工人名が書かれています。7世紀には「大神部見乃官」、8世紀には「大神君百江、大神部得身、大神部麻呂、内椋人麻呂、□□乎麻呂、押坂□、大神部□□養」があり、8名分の人名が確認できますが、半数以上を「大神君・部」が占めています。このことから、牛頸窯の生産工人は大神部が主体的に関っていたと考えられます。大神部は、奈良県桜井市にある大神神社を祭る大神氏に由来します。こうした工人の由来や陶棺の出土は近畿地方との関係を十分に想起させるものです。さらに、九州で牛頸窯にのみ見られる多孔式煙道窯は大阪府陶邑MT5-Ⅲ号窯跡でも確認され、双方向の交流を持っていたことを示しています。

こうした考古学的な事象に対し、文献史学側から牛頸須恵器窯跡を「那津官家」直属のものとする指摘があります。「那津官家」は『日本書紀』宣化天皇元年に那津（現在の福岡市博多）の口に修造された屯倉で、大和政権の政治・軍事の拠点でした。牛頸須恵器窯跡の操業の始まりは、この「那津官家」の修造記事後の時期であり、群内で生産された瓦が「那津官家」に比定される比恵・那珂遺跡群から出土していることは、牛頸須恵器窯跡との関りが深く、地方にありながら大和政権との結びつきを持っていたことを示しています。このことが、7世紀後半に牛頸窯が筑前で集中的な生産を行うことができた背景であり、以後この関係は大宰府へと引き継がれ、西海道一の窯場へと発展していきます。

このように、牛頸須恵器窯跡は九州の須恵器生産にとって極めて重要な位置を占めるだけでなく、当時の社会状況に的確に応じた生産をおこなっており、古代社会を考える上で極めて重要な遺跡群です。



梅頭窯跡覆屋
(大野城市上大利5丁目三兼池公園内所在)

現在、牛頸須恵器窯跡は山中に残る窯跡を中心に12ヵ所約22haの範囲を国史跡として指定しています。今後窯跡は緑を残したまま保護を図ってゆく予定です。窯跡を保護していくことはこれを包含する山の自然環境を守ることでもあり、良好な自然環境を守るとともに、古代の須恵器生産地の有り様を広く公開・保存していきたいと思えます。

大野城市の文化財 第44集

平成24年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2番1号

印刷 株式会社 コーユービジネス
福岡県福岡市博多区博多駅前3-22-26 大野ビル